

まゐる
金 忠 輔



吉川英治全集

第6卷

小泉 信三

小林 秀雄

佐佐木茂索

獅子 文六

講談社版

著作權者の了解
により検印廃止

吉川英治全集・6

恋ぐるま 金忠輔

著者 吉川英治

装幀者 杉本健吉

発行者 野間省一

発行所

株式講談社

東京都文京区音羽二―二―二 郵便番号 一〇二
電話 東京(〇三)九四五局 一一二二(大代表)
振替 東京三九三〇

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 大製株式会社
本文用紙 日本バルブ工業株式会社特産

第一刷 昭和四十五年二月二十日

第七刷 昭和四十九年五月二十日

定価は箱に表示してあります

© 一九七〇年 吉川文字 (文2)

目次

恋ぐるま

一

金忠輔

三三

恋
ぐ
る
ま

おんな儲けの巻

軍夫の雁八たち塹壕に命びろ

いをするこ

騎竜將軍糺と二階堂典兵衛が

一騎うちのこと

今にも沛然と、ひと降りやつて来そうな空の形相である。

大きな合戦のあった後には、必ず、盆をくつがえすような大雨が降るといふ……。

元和元年の五月七日だった。

今の時刻にしていえば、午後五時ごろというのに、摂津の平野といったいは、夜半よりまっ暗で、ぬるまっこの陰風と、血なまぐさい晦冥が天地をつつんでいた。

ひろい闇の一角には、淀川が赤銅を溶いて流したように、うねうねと、暗黒の海へ走っている。川の右岸に、野火のように裂けていくつかの火の手は、一昨日から焼けつづけている市街の火災だった。

その炎の海のなかに、巨大な大坂城のすがたがあった。それも、この夕方——約一刻ばかりまえから、天守、四層楼、狭間などから、いちどに火を噴き出してまっ黒な煙りを冲天にあげ

ていた。

『ああ、とうとう豊臣も没落だ……』

厚ぼったい暗やみの底で、誰か、がっかりしたように呟いたものがある。

四五日まえの戦に、敵の真田勢にそなえるため、寄せ手の鍋島がたて掘った船場口の塹壕に、八九人の軍夫が、牛のようにごろごろ寝そべっていた。

その、窪地の底での話し声だ。

『なあ、おい』

『うるさいなあ。誰だい』

『おれだよ』

『まっ暗で、鼻を掴まれてもわからねえや』

『雁八だよ』

『雁八？……あ、紀州の雁で、きか。なんだい』

『よく燃えるじゃねえか。いつになったらあの火が熄むんだろう』

『つまらねえ事を考えていやがら。焼けるだけ焼けれや、冷めたい灰になるのよ』

『あれが、太閤殿下の耀いていた、大坂のお城かと思うと、涙

がこぼれるなあ』

『どうして』

『おれのおやじが若い時なんかには、大坂城の城普請というと、まるで、黄金の雨が降るような騒ぎで、仕事だか祭だかわからねえくれえな景気で、石曳きの綱につかまると、一日の間が青銅一刺、そのころの世間の景気と来たひにや、話のほかだという事だった。……それを思うと、こん夜の空は夢みたいだ』

『栄枯盛衰というやつだろうな』

ま　る　ぐ　恋

『なんだかしらねえが、死人くせえ風ばかり吹いて、おらあ国へ帰りたくなった』

『ばかめ、折角きょうまで辛抱して、今帰って合うものか。もう十日ばかりの我慢をすれや、勝ち軍のお手当ぐらいはあるだろう』

『あ……またほかの曲輪へ火が移ってきた。焼ける！　焼ける！』

『今ごろは、あの本丸の火の中で、秀頼だの淀君だのが、泣いたり吠えたり、腹切り支度をしている時分だ』

『その中にゃ、美しい女もいるだろうなあ』

『あははは。こいつあ雁公らしい心配だな』

そこらの黒い人影が、野獣のようにうごめいて、いちどに、賤しい笑いかたをした。

すると、塹壕の上に一人だけ見張に首をのぼしていたのが、ふいに、

『おいっ』

と、手を振りながら、何か言った。

『？……』

ぎょつとしたように、すぐ笑い声は滅んでしまった。

『な、なんだい？』

塹壕の底の眼が、みんな上へ向いて光った。

とたんに、その男が何か大きな声をあげた。そして明らかに人の聲音を間近に聞いたので、誰からともなく怯氣を破って、

『それっ』

と、そろそろ這いあがった。

彼らが、塹壕を躍り出すと同時に出会ったのは、鏑々たる金属的なびきをさせて駆けて来た一群の人影だった。それは、乱軍のなかを脱して来た四五名の徒歩武者と、その肩に担

かれた一輿の塗駕が揺れて来る響きである。

駕も戦火の下を通って来たことを惨として物語るように、蔽は破れ、簾はちぎれ、房は焼けてちらちらと火がついていた。同じように、それを護る徒歩武者たちの袖にも、焼け焦げと、血とが、痛ましくこびりついている。

(落武者！)

人夫たちのするどい眼は、直感的に駕の中をさぐり込んだ。どうだろう！　その中に何やら眩い唐織のかいどりを被いで、わななきながら顔をかくしているのは、まだ漸う、十七か、八の年ばえに見ゆる気だかい婦人ではあるまいか。

『待て待て。おいッ、おいッ。何処へ行くんだ！』

彼らは、甘いものを見た蟻のように、駕を抑え、一方、武者たちの前後を完全に押とり巻いて、喚いた。

『察するところてめえ達は、城中の炎から逃げ出して来た落武者だろうが、ここは寄手の鍋島家の陣地、この先は成瀬隼人正様の陣地、どこへ行っても、柵や塹壕で逃げ終えるはずはねえのだ。――駕を下ろせ！　その駕を。おれたちを人夫とあなどってじたばたすると、すぐに、呼子笛をふいて、伏勢をよび集めるぞ』

『だまれッ』

囲まっていた駕側の武者は、吠えるだけ吠えさせておいて、

嗷鳴った。

『落武者とは何事だ、われわれは、御本陣茶臼山より城内へ非常のお使として参った坂崎出羽守の家臣、いそぐ道を、邪魔するな』

『なに、それじゃ、味方なのか』

『うろたえ者め』

『が――待て』

『まだ申すか』

『なんぞ証拠を見せろ、味方であるという証拠を』

『戦時火急の場合に、いちいち左様な物を所持しては歩かん』

『こいつあ怪しいぞ、その火急の場合に、敵の城中から、女を担ぎ出しているやつはあるまい。駕の女は何者だ！ 駕を下ろせ』

『下人輩の知ったことか、聞きたくば、鍋島家より使番を立てて御本陣へ伺ったがいい』

『下ろせというのに、やいッ』

『おのれ、まだ分らぬのか』

『おう、わからぬえ』

と、人夫たちは声をあわせた。そして、彼らの飢えたる或る野心が、駕の中に頼っている美しい好餌に勇気をふるい立たせようとした。

と、その時、一足遅れて、後からそこへ駆けつけて来た頑強らしい武士があった。鉢兜をうしろに投げ、乱髪には汗止を締めて、具足の糸はほつれていた。ふと見るとその人は、面貌の醜異なので誰でもいちど見たら忘れない徳川家の旗本坂崎出羽守であった。

『おお、御主君』

と、武者たちはすぐに彼へ告げた。

『鍋島家の敵命とやらで、無智な人夫どもが、何と申しても通しません。いかがしたものでございましょうか』

『かまわぬ、かまわぬ。大御所のおいつけによって城内に使用した吾々の道を阻むものは、味方といえども斬って通れ』

人夫たちは、その音声に驚いて、思わずそこをひらいた。出羽守は、彼らの意気地なさを失笑しながら、

『このお駕のうちに渡らせらるるは、誰あろう、こよい落城と

共に自刃された秀頼公のおん室——大御所にはお孫にあたる千姫様じゃ。無礼をするなッ』

あつ——と人夫たちは吾がちに飛び退いた。胆を消して二の句がつけなかった。そのまに、武者たちを先にして、綾にくるまれた貴女の駕と出羽守とは、古巻物をぬけ出した妖魅の光耀の如く、黒い、ひろい、暗の風を捲いて、燦々と駆けすぎてしまった。

『なアんでい、ばかばかしい』

茫然と見送った人夫たちの眼には、駕の中にチラと見た若い上臈の脅えあがった襟もとの白さと、臘月のように憂わしげな眉やあの眸が、いつまでも、淫らな空想をよんだ後頭部にこびりついて消えなかった。

『ああ、つまらぬえ』

誰ともなく、空疎な声を投げて、

『ええこう、あんなものを見ちまったんで、よけいに、あたりが地獄みたいに暗くなったぜ』

『おら、嬢が、恋しくなった』

『もう少しだ、もう少しの辛抱だよ。今の話しても、秀頼公は目害をしたっていうことだから、さしもの大戦も、こん夜かぎりでおしまいだろう』

『そう願わなくっちゃ、こちとらはもう体がつぶかぬえ』

『どう賽ころが転がっても、おれたちのふところへ、天下が廻って来るわけじゃねえんだからな』

『軍書読がよくいうじゃねえか。——一将功成つて万骨枯るッて』

もうやがて亥の刻に近いであろう。然しこん夜は月も北斗の位置もわからない。又、城の太鼓も寒山寺の鐘もそれを告げない。時もなく光もなく、ただ業火の焦す空と血なまぐさい大地

の闇とが無言であるばかりだった。

恋ぐるま

てんでに、無智をつつまずに、淋しさも不平も、馬鹿話に言いいたびれると、人夫たちは又、もとの塹壕のなかへもぐりこんで、枯れ草を抱きながら、故郷をおもひ、明日の日を考えた。そして何とはなく、まだ眼の先から消えない千姫様のあの姿が、こんな場所であるまじき想像をさせたり、抑えがたい人間の本能を焦だたせて来るのだった。

『ああ、嫌が恋しい……』

誰かが、囁言のようにいうのも、冗談として笑う者もなくなつてしまった。そしてやがてはその本能もただ枯れ草を温めるだけでうとうとと眠り疲れて来る。

『やいつ、寝ちゃあならねえぞ』

時々、気を醒ましたものが、そう言つて互を呼び合つた。

その度ごとに、

『うむ……』

『寝やあしねえよ』

と、半醒半眠の気だるそうな返辞が聞えた。——一刻ばかり経つた。

眠るまい、眠るまいとしながら、いつのまにか、隣りの野が野を誘う。たとえ、大坂城がどんなに燃えようと、あしたの朝のもつそう飯の兵糧がどうなろうと、願わくはこの儘こん夜は事なかれかし、と彼らは祈りながら怠惰な涎をたらしていた。

『……来た！』

突然、ひとりが、寝呆けたように飛び上つた。

竹でも裂くような、みりッという音が、どこかの水辺であらう、おそろしく波響的に聞えた。

『こんどこそ、味方じゃねえぞ』

人夫たちは、臆病らしい眼を光らして、塹壕の底へ底へと、首をすくめた。

異様な音は、二三度、そこへ聞えた。

曠野の空は、夜の更けるにつれて、地獄の夕やけのように、どんよりと気味わるい赤さをおびている。彼らは、居眠りをさました寒さを背すじに這わせながら、怖々と、窪地の上を見廻した。

と——堤のうえを、ひとりの騎馬武者の影が悠々とあぶみを鳴らしてくる。兜は鹿角の前立だった。八幡座の星が夜光の石を埋めであるようにチカッと光る。黒皮胴のよろいには、長やかな陣太刀が横たえられ、一方の手に馬の手綱、右の小脇には黒檜の槍……。

チャリン、チャリン、と遙かな空の紅炎に輪郭を染められながら、すぐ頭の上を通つてゆく。

『叱ッ……敵だ』

『敵だ』

『しかも……恐しそうなやつだ』

人夫たちは、こっそりと、眼と眼を見あわせながら生唾をのんだ。

彼らは、戦士ではなかった。

小荷駄の運搬だの、死骸かたづけだの、駄馬同様な労役に就いて、一日なにがしの賃銀で働かれている、いわば戦場の出稼人だ。

豊臣恩顧のものでもなければ、関東方というのでもない。従つて、運わるく、敵にぶつかる場合があつても、戦をやることは禁物である。

で、——今も、堤の上を悠々と通つてゆく一騎は、たしかに、大坂方でも相応な武将にちがいないと見ていたが、人夫た

ちは、早く過ぎ去ってくれるようにと、息を殺して念じていた。すると、その瞬間だった。

『待てッ!』

と、何処かで、肅殺たる気をふくんだ、底力のある声が、闇を破った。

『……………』

馬上にゆらりと高い鹿角の兜の星が、きつとうしろを振り向いたかと思うと、すぐ近くの泉の洲に、もくりつと白い煙りが玉になって、蘆の穂の風に流れるのが眼に映った。

ずど——んッ!

刹那に、とどろいた鉄砲の一発が、たしかに、人か馬か、どこかに中った。馬は、朽木倒れに脚を折って、騎上の人影を鞍つばから振り落としたのである。

『あッ!』

——兜は飛んだ。

人は馬を離れて、単身、もんどりを打ったまま、土手から塹壕のそこへ、まっ逆さまに、草の穂をちらして、ころげ込んだ。

『わっ……………』

驚いたのは、窪地のそこに、鳴をしずめていた人夫たちで、総だちに狼狽して、まるで、關汁の泥鰌のように、われがちに土手の腹へ逃げ廻る。

人夫のひとり、紀州の雁八という鈍重なからだを持った男も、途端に、夢中になって、誰かの腕にかじりついた。

その臂力に吊るされて、雁八のからだは、足を浮かしたまま、ずるずると崖のうえに引き摺りあげられた。

だが、船場の原の一角に出て、どんよりと赤い空の下で、相手の者をながめた時、彼は思わず、悲鳴に似た情ない声で——、

『た、たすけてくれッ……………』

と、絶叫した。

無我夢中で、われからすりついた固い腕は、南無三、敵の武将であった。——然し、まことに幸運だった彼は、その黒皮胴の小脇に引つ吊るされたまま、十二三步! 疾風を食らって眼を眩したかと思うと、

『えい。離セッ!』

鎧の袖に取つついた蠢蠕でもはたくように、大地へ抛り捨てられていた。

長蛇を逸した——と見た蘆の中の鉄砲は、咄嗟に、

『しまった!』

と叫んで、一撃にし損じた種ヶ島の銃を沼のなかへ投げすてた。

そして、猛虎のおどり出すように草柄の陣刀をひっ掴んで、
『——やあ、仙石糺待てい! 仙石糺しばらく待ていッ。徳川家の旗本にさるものありと知られたる茶臼山黄幌組の使番、二階堂典兵衛、見参。——二階堂典兵衛、見参』

鎗のある、戦場すがれの声をあげて、ザッと、蘆の中から駆け出した。

馬をすてて、船場の原を駆けだした、黒皮胴の逞ましい男は、追いかけて来る名乗を聞くと、
『オオ、不足のない敵』

と思ったように、槍の石突をめぐらして、赤い曠野のまんなか待ちかまえた。

そこらの草むらへ、土竜のように這いこんだ人夫たちは、仙石糺ときいて、また胆を冷めたくした。

こんど、冬の陣の講和がやぶれて、ふたたびこの初夏の五月に入って、関東上方の乾坤一擲となった大激戦に、いつも、木

村長門守の手について、東軍をなやます一人の騎馬武者があった。

彼は常に、黒皮胴の鎧に、漆黒の黒鹿毛にまたがり、若江の合戦、玉串焼の激戦などいたるところに東軍を駆けちらして、その鹿角の前立を遙かにみても、井伊の赤備えが陣を崩したとさえいわれる。

騎竜將軍！

木村の騎竜！

たれいうとなく彼を呼ぶにそうだった。業を煮やした井伊直孝のごときは、かれの首に、千石の恩賞を賭けたという噂さえある。

その、騎竜將軍仙石糺は、かの太閤荒旗本のひとり仙石權兵衛の嫡男で、年ばえは二十六七、兜につつま紅顔に、うす化粧をほどこした、源平時代の風習にしたがえば、いかに華やかな若武者であるかも知れない。

然し、荒旗本權兵衛の子、騎竜といわれる糺の風采は、決してそんなものではなかった。冬の陣からこの夏の陣にかけて、戦塵にまみれた皮膚は黒鉄のように焦けて、らんとした双眸のかがやきと、兜の紐の下だけが白い。

『やあ、それにおるは、騎竜といわれた仙石糺殿とお見うけする。あれ見たまえ。すでに大坂城も炎につつまれて、秀頼公一門、すべて御自害の噂さえあるのに、ただひとり、どこへ落ちて参られるぞ。——いざ、二階堂典兵衛の刃をうけて、ほまれある騎竜の名を完うしたまえ！』

追いつくが早いのか、典兵衛は、カッと口を開いて、こう叫んだ。

糺はそれに黒檀の槍をびったりと向けた。

『おうっ。この天九郎の味をご所望か』

『なにを！』

ざくりツと双方の草摺が鳴った。陣刀は鞘を脱して、槍の千段をバーンと払う。

咄。咄。

天九郎の穂先はスッと騎竜の掌のうちにかくれた。おそろしい光りをおびた双眸が、ジリジリと典兵衛の胸板にせまる。黄幌組の典兵衛も、徳川方では精悍な名をとった男だ。かれの陣刀は波をうつように上下にうごいて隙をうかがっていたが突然、ビュッと光の渦をハネてゆくように、敵の手もとへ送り込んだ。

槍！ 陣刀！

閃々と薙ぐ！ りゅうりゅうと突く！

二人のからだは夏々と具足の音を触れあいながら、いわゆる虚々実々の精を争った。

勝負はつかない。

かれも騎竜將軍といわれた人。——これも徳川黄幌組の一名物、二階堂典兵衛。

『面倒』

と、まず、仙石糺から、槍をすてた。

『のぞむところ』

と、典兵衛もすぐ刀をなげて、ぱっと相手に組みついた。

えいっ。

おうっ。

巨きな二つの甲虫が怖い顔をして咬みあったようである。或は、死を賭して闘牛が角をふっていどみ合うようである。

ずでん！

『あっ』

と言ったのは典兵衛。

いやというほど、大地に背骨をたたきつけられて、思わず、不覚な声を發した。

『返せ！』

躍り立つように、匆^はね起きた時には、小憎い敵よ、仙石糺は天九郎の槍をひろって、博^{ひら}芳^うケ淵^{ふち}のほうへ、後も見ずに駆け出している。

『騎竜、返せ！ 糺^{たづ}待てい！』

二階堂典兵衛は、船場の原の闇を吠えながら、陣刀をさげて十数町追いかけた。

だが——暫くすると、あなたの川筋で、わあっという陣声がみだれ揚つた。川すじ一帯は、関東の船手方九鬼守隆^{くきしゅりゅう}のまゐるところ、そのほかは、蜂須賀、池田、鍋島などのかためている陣地である。

むろん、仙石糺は、その警戒線にひっかつたにちがいない。

一人の敵に、幾百の人数と、不知^{しら}火^ひのようなあまたの篝火^{かき}と、幾たびかけたたましく鳴る呼^よ笛^{ふえ}とが、一瞬、ひろい闇をどよませた。

『ええ、惜しい首をひろいそこねた……』

典兵衛はあきらめた。

実をいうと、彼は、天神附近に陣地のある有馬道^{うまみち}紀^{のり}の家中に知り人があつて、そこへ訪ねてゆく途中だった。使番としての公用ならば、或は、見のがしたかもしれないが、非番の身であつたし、落武者が大坂城の驍^{せう}将^{しょう}仙石糺^{せんせき}とみたので、たずさえていた種ヶ島を、出来心に、一発ぶっぱなしたものであった。

ところが、どういう縁か。

その夜、彼が、有馬の陣地へよつて、ふた刻ほど後に主君家康の本營のある茶臼山の陣門まで帰つてくると、そこで、又々

仙石糺とぶつかってしまった。

然し、こんどは、一騎討ちにも及ばない。糺の腕には、繩がかかつていた。

糺は、典兵衛をじろりと一晒^{せん}して、

『やあ』

と、磊^{らい}落^{らく}に声をかけた。

『やあ』

と、典兵衛もそれに答えた。

九鬼、池田、鍋島、三藩の武士にものしく取り囲まれて、すこしも怯^{おそ}む色なく、槍刀の先が袖にふれそうな陣門へ、悠々と引立てられて行つた嫡^{ちやく}人の将を、典兵衛は黙然と見送つていた。

そして、独りごとのように、

『……惜しい侍だ。……いや、おれの種ヶ島がはずれたのは、な惜しいことだった』

と、呟^{ささ}いた。

×

×

×

夕がたから夜にかけて、そのほかの陣線でも、頻々^{ひんひん}と大坂方の落武者が捕まった。

雑魚もあれば、大魚もある。

そして、夜の八ツ半頃には、大坂城の巨大な輪郭^{りんかく}は、まったく、全姿を紅蓮^{こうれん}のなかに没して、この日本にのこる豊家唯一^{とよけ}の偉観^{ゐかん}を、最後の灰にすべくいそぐ焰^{えん}の音が、その辺までもバリバリと聞えてくる。

『おうい。あつまれ——』

人夫頭^{じんぷ}の早川権内^{さかき}が、そこらの塹壕^{えんごう}を呼びあつめていた。彼は、鍋島家の足輕^{あしかり}だった。

『組頭^{くみだう}だ』

と、人夫たちは、そこらの草むらや、堤の下から、わらわらと駆け出した。

紀州の雁八も、そのなかに、鈍重で狡そうな眼をして交じっている。

薬鐘あたまたの早川権内は、顎で人間をかそえながら、うなずいて、

『船場は六番の塹壕にいたのはどの組だ』

ちょうど、雁八が前に出ていたので、

『へい。あつしの組でございます』

と答えた。

『たわけ者め』

権内は、雁八を組の代表者として、叱りとばした。

『最前、仙石組があつたのを通つたと申すではないか。なぜ早く合図をせんか。ばか者め！』

と、もういちど雁八をどなりつけて、

『——さて、これから、天神橋方面へ、間道さがしに参るのだが、雁八、貴様の組は梅田から鷺洲のあいだを持ち場として、ぬかりのないように、怠けぬように、よく見て廻れよ』

と、それぞれ、行く先を吩咐けた。

だが、権内のことがばが簡単すぎるので、人夫たちには、仕事の目的がよくのみこめなかった。そこで、誰かが、畏る畏るたずねると、組頭の薬鐘は、大御所のような威厳をもって、説明した。

『よいか。大きな声では言えんが、つまり、大坂城はあのとおり、まったく焰につつまれてしまったが、もっぱら風説によると、城の中からどこかへ抜ける間道があるというのじゃ。……これや、あれほどの名城として、ないはずはない。然し、あつたひには、大変な手ぬかりじゃ』

『へ……なる程』

人夫たちは感服した。彼らの眼には、老足輕の薬鐘もなかなか偉く見えた。

『——分らんか？ 分るだらう。かくのとおり、四面きびしく百万の御軍勢が、城下をつつんでしまったが、もし、大坂城のうちに間道があつてみろ。かんじんな、秀頼、いや秀頼公……淀君、大野治長、荻野道喜、真田大助、毛利勝永、竹田栄応、速水出来麿……まだたくさん生き残っているはずだ。何しろそれらの股肱のものが、それ、影武者だけを炎のなかに残して、抜け道から、何処へ落ちてゆくまいものでもない。……分ったか』

『わかりました』

『行け！』

と言つて、又、あわてて言い足した。

『あやしき者、あやしき間道を見つけて出して、即刻、もよりの陣地に知らせたものには、黄金十枚のご褒美があるぞ。ぬかるな』

黄金百両。かれらにすれば、一生食える金だ。——

ぬかるな、ぬかるな。口々に言いはやして、人夫たちは、鍋島家の足輕たちと共に、手分けをして、間道さがしに向つた。

その、間道の有無を知るのは、大坂の城が落城にせまらぬうちから、家康が各所の陣へ向つて、秘密裡に搜索を命じていたところなので、また今夜も、人夫の手まで狩り出してゆくところを見ると、遂に、この最後の一刻まで、まだその、有か、無か、ふたつの解決がつかないでいるとみえる。

滅亡の火焰城！

茶臼山の本營で、諸侯の勝ち軍の祝賀をうけながらも、家康の胸には、まだかすかな不安と謎をのこしていたのである。

雁八戦場に美人を拾つて遽に
故郷へ帰ること

安治川の残月に怪しき貴人の
群影を見ること。続、南海た
ばこ船のこと

刻一刻。

焼けくずれてゆく居城の櫓に床几をおいて、豊臣秀頼は、静かに、焰の音を聞いていた。

城内、朱三の櫓は、風上であつた。

心頭を滅却すれば火もまた涼し！

秀頼は、甲斐の快川和尚がいつた最期のことを頭に思い浮かべてみた。

朱三の櫓から目の下にみる炎は、真に美しい炎であつた。

まるで、金や銀や錦の絢爛なもののばかりが燃えるような火の色である。——だが、そこに集まつた人々の顔は、あまりにも悲壮な緊張にみなぎっている。

『見そこなつた男だ、仙石組こそ、そんな侍ではないと思つたが……』

と、誰か、罵るように言う。

秀頼のうしろにいた、竹田栄応がそれにたずねた。

『組どのが、どうしたのですか？』

『あくまで、御主君と生死を共にすると申していながら、今夕本丸へ火が移つた頃、城外へ脱出して、ただひとり落ちて行つたそうです。』

『何か、考えがあつたのでござらう。』

そばから、弁護する者もある。

『いや、落ちて行つたは、急に命が欲しくなつたに相違ない。さつき、立ち帰つて来た速水来麿の話によると、組は、船場附近で敵の擁人となつたそうです。苦しい末路をとつたものだ。』

『何、かれほどの武將が、意味なき生を惜しもうか。人の善悪は死後に論ぜよ、ということばもある。ここにいる吾々とても、真の最期にいたらぬうちは、まだ、誰の評にも服するわけにはゆかぬ。』

栄応の一言に、みな黙つてしまった。

……しばらくすると、また気がついたように、

『や。……お愛の局も見えぬ。』

『本丸から、朱三の櫓へ火を避ける途中、煙りに巻かれてしまったのであらう。』

『ふびんな事をした……。あの時は、ちょうど、家康の旗本のもの、千姫様をうけ取りに来ておつた混雑の最中……』

『朝鮮国からご献上の、コマという大きな犬も、煙りのなかで吠えぬいていたが、日ごろから、コマを可愛がっていたお愛の局のこと故、それに心をひかれて、ご一同に、はぐれたのではないか。』

——ふと、淀君が涙をふいている姿に気がついて、その話も糸を切つたようにきれてしまった。

お愛の局、——それは、淀君の姪であつた。わが子か、妹のように、侍女として目をかけていた娘であつた。

ああ、それも居ない。

晩秋の木の葉が、一葉ずつ、ほろりほろりと落ちて裸木になるように、周囲の人かすが減つてゆく。

赤地錦のよろい直垂に、おなじ仮粧袴、それへ、梨子地おど

しの具足をつけて、鬼喰み藤四郎の陣刀を横たえた支度が、その夜、朱三の櫓にのこった、二十七名の中心に居る、秀頼さいこの姿であった。

女は、秀頼の乳母であり木村重成の母である——大蔵の局、あえばの局、和期の局、ほか四五人の侍女たちが居合わすのみで、醍醐の春のころをおもえば、淀君は、今の自分が、現世のものとは信じられない。

『おおっッ……』

不意に、みんな息づまるような声をあげた。

俄に、風が変ったのである。——むなぐるしい熱風が、又も、朱三の櫓をとりまいた。

『——風が変りました。芦田曲輪の土蔵にお座をお移しなされませ。治房、ご案内いたしまする』、

階段を駆けあがって、こう言ったのは、大野修理の弟、治房のたのしい声だった。兄の修理太夫治長には、とかく、味方のうちでも、反感をもつものもあったが、若い治房の沈着なさしずには、誰も、遅疑なく従った。

一門、さいこの死の席は、治房の案内で、芦田曲輪の土蔵に移されたのである。

——その時刻。

大病人をのせた一挺の塗り駕が、足輕にかつがれて、桜門から城内にはいつて来た。むろん、濛々たる黒煙りと炎を犯して——。

駕わきに付いているのは、井伊直孝とその部下である。煙りが吹きつけるたび、駕の中の病人は、ゴホン、ゴホンと咳きこんでいた。

『この辺じゃ』

苦しげな喘ぎ声が洩れた。

『片桐殿』

と、直孝がそばへ寄った。

『おろしてください……』

痩せ衰えた白髪のお武士が、直孝にたすけられて駕の戸からあらわれた。見ると、重病のために永らく屋敷にひき籠っていた片桐且元である。

故太閤の腹心であった彼は、誰よりも、城内のようを知っているであろうと、家康からふいに呼び出しをうけて、この火災のなかへ、病軀を運んで、何ごとかを見届けて来よと命じられて来たのである。

且元は、ふきつける黒煙りに、袖で鼻口をかばいながら、芦田曲輪の土蔵のほうへ、鬼のような病軀のかげを、蹣跚とあゆませて行った。

そして、直孝を顧みて、

『……この辺でござる。城内の間道は、たしか、この唐物土蔵の……ゴホン、ゴホン……』

語尾を痰にからませて、彼は、胸と口を抑えたまま、激しい咳にむせあがってしまった。

直孝は、うしろにいる、安藤重信、近藤石見守などと、何かならずき合いながら、部下を分けて、唐物土蔵をとりまいた。と——。

朱三の櫓ひとつを隔てて、その通りにも熱風に舞う火の粉がばらばらと音を立てて落ち散らばる。附近には、一兵の敵の影もなく、土蔵の扉はかたく閉じられて、中から微かに念仏唱名の声が蚊のうなるように聞えて来る……。

『秀頼公、ご一族は、この唐物土蔵のうたと見えますぞ』

誰か、愕然とさけぶ者がある。

士卒に足がかりをつくらせて、直孝をはじめ、近藤石見守、

そして且元も、その上にあがつて、金網窓の隙から、内部の態をのぞき込んだ。

ああ！地獄。

赤地錦の直垂の貴人、白統のかいどりに黒髪を投げてうち伏す女性、鎧をぬいで死の支度に瞑目する武將、そして稚ない小姓、いじらしき侍女、合掌したまま生きながら死せるがごとき入道頭の人々など、およそ二十七八人——。

念仏の声……それはその人々の唱えであつた。

『オオ……』

と、且元は落涙して、

『秀頼公、ご一族、はやお覚悟と相見えます……』

『その君は？』

と、直孝は検分の眼を光らせた。

『あれに在す、赤地錦の……色白く、肥えたおん方……』

『ウム、淀君は』

『そのすぐそばに御合掌の白衣の御婦人』

『あえばの局は、次の老女ですか』

『おう、あの老女も、最後まで居たか……』

『大野治長は見えぬようだが』

『いや、あの隅の、短繁の下に』

『ウム』

と、直孝は、眼で数えて、総勢二十余人の人影を読んだ。そして、病人の且元をふたたび駕へのせて城外へ帰したが、その駕が、堀の唐橋を渡りきらぬうちに、轟然たる砲火が、いちどに、芦田曲輪をゆるがした。

唐物土蔵は火をふいて崩れた！

朱三の櫓は火ばしらになった！

『わ——っ……』

井伊の軍兵が、いちどにあげた勝ち鬨が、魔風にのつて天空にひろがった。

× × ×

焼け跡から、骨喰み藤四郎の刀が出たのを証拠として、直孝は、秀頼の最期を見届けたことばにそえて、それを、茶臼山の本営へ送った。

だが……ここに、誰も知らないふしぎがあつた。

天神河岸の裾、安治川の東岸は、その辺いちめん、蕭条とした蘆のしげみで、時折、ばたつと空を搏つ影があるかと思えば、それは、五位鷹のむれである。

鍋島の陣にも、有馬の陣にも、遠かつた。

時々、大河のまん中を、船手方の軍船が、灯しをのせて上下していたが、大坂落城、秀頼一門自刃のうわさが伝えられてから、いちどに気がゆるんだか、夜半すぎには、櫓の音もしない……。

三更——四更——ほととぎすの啼きしきる明け方のころ。

入江になった、五条八幡の森から蘆の中の小舟へ、しのび、しのび……影を移した人々がある。

舟は、三艘。

櫓支度をして待っていたのは、薩摩訛りのある屈蔵な武士たちであつた。具足ではない。彼らはみな覆面に膝行袴だった。

ギツ、ギツ、ギツ、ギツ……髪切り虫の啼くような櫓臍のきしみも、低く、ひそかに、満々たる安治川の中流へきつて行く。

また、ほととぎすが啼く……。

有明の月がほのかだった。

見よ。なんという不思議だろう。その白い月かげをすかして見れば、船上の人はこれ、赤地錦の直垂に仮粧袴をはいた貴人